

## 【表現学関連分野の研究動向】

## 日本語文法(史的研究)

岡部 嘉幸

日本語の歴史において中世という時期は古代語から近代語への「転換期」として非常に重要である。今期は、この「転換期」としての中世における文法変化を真正面から取り上げた吉田永弘著『転換する日本語文法』(和泉書院、2019.2)が出版された。本書では、条件表現、可能表現、尊敬表現、断定表現を対象として、変化が生じた時期とその変化の過程を実証的に明らかにするとともに、なぜそのような変化が生じたのかという理由を「既実現/未実現」という観点から説明する。そこで示される論は個別の現象の説明として優れているだけでなく、古代語から近代語への変容の総体を考える上で参考になる。

3月に国立国語研究所が構築している「日本語歴史コーパス」(CHJ)へ「和歌集編」、「江戸時代編Ⅱ人情本」、「明治・大正編Ⅰ雑誌」、「明治・大正編Ⅲ明治初期口語資料」が追加された。これにより、CHJは、ひとまず、奈良時代から近代までの資料を途切れることなく検索できるようになった。この画期的な出来事を喜びたい。今後、単なる用例検索のための利用に留まらない、コーパスならではの手法に基づく通時的研究が盛んになることを期待したい。

ところで、コーパスの利用が盛んになるにつれて、調査資料の標準化(コーパスにある資料だけが扱われること)が生じつつある。資料の標準化は研究者同士

が「同じ土俵」で議論ができるという点で有意義であるが、他方、調査資料の限定化を招いてしまう。この時代の言語資料として何がありえ、また、コーパスにおいて当該資料が選ばれている理由は何かというような「資料性」の問題について常に自覚的でありたい。その意味で『国語と国文学』令和元年五月号で「日本語史料と日本語史の研究」という特集が組まれたのはタイムリーである。犬飼隆「木簡を日本語史料として利用する」、木田章義「抄物研究の視点」をはじめとして「資料研究」の要点を知ることができる。

資料の標準化とは逆方向の動きとして、これまで活用されることの少なかった日本語史資料の「発掘」とその資料の日本語史上の位置づけの検討を行う論文集の刊行もあった。金澤裕之・矢島正浩編『SP盤落語レコードがひらく近代日本語研究』(笠間書院、2019.8)である。本書では、明治後期から大正・昭和初期にかけての東京落語・上方落語の資料性が多角的に検討されている。その概要は、矢島正浩「なぜ落語資料なのか一序にかえて」によって手際よくまとめられているが、SP盤落語資料が「近代話し言葉」資料として、また、「標準語」資料として、さらに、近世語(江戸語・上方語)から現代方言(東京語・関西方言)への文法変化に関わる「日本語史」資料や「方言」資料としても活用できることが、各論文によって、具体的に示される。このような新たな資料の「発掘」も重要だろう。

紙幅の関係で触れられなかったことも多い。諸賢のご海容を請う。

(千葉大学)